

コラム 西洋古代史の泉 7

古代とともに生きる

南 川 高 志

ミラノとヴェネツィアのほぼ中間にある都市ヴェローナは、古代、中世、近世の遺跡や町並みがよく残り、北イタリアで最も美しい街といつてよいところである。ヴェローナは紀元前1世紀からローマ都市となり、現在も円形闘技場がこの町のシンボルとなっているが、世界文化遺産に登録されたのは2000年で、少し遅い印象があるほどだ。

1世紀に建造されたヴェローナの円形闘技場(写真a、写真b)は、楕円形の長径が152メートル、短径が128メートルの、イタリアでは3番目に大きい闘技場である。ヴェローナ産の切石と煉瓦で築いた2層のアーチ構造になっており、アリーナの面積は3,200平方メートルもある。現在、この闘技場を使って、オペラやバレイ、音楽コンサートなどが上演されている。アリーナの一部が舞台とされ、その他のアリーナ部分すべてにわたって平土間席が設置されている。円形闘技場の観覧席だった部分はすべて、オペラ客用の44段の階段席として使われている。18,000名を収容できるという。この広い空間を使って、ビゼー「カルメン」やヴェルディ「アイダ」などの有名作品が演じられているのである。

ヴェローナには、ローマ時代の劇場遺跡もあるが、これも復元され、再利用されている(写真c)。劇場遺跡は、円形闘技場がある市の中心部から北東に向かって歩き、ピエトラ橋でアディジェ川を渡って、丘を登っていく。劇場のかつての舞台の前にステージが特設され、舞台部分にはプラスチックの椅子が設置されて平土間席となり、階段状のかつての観覧席も客席として整備されている。ここで、芝居やバレイなどの催しができるようになっているのである。劇場遺跡の復元利用され



写真 a

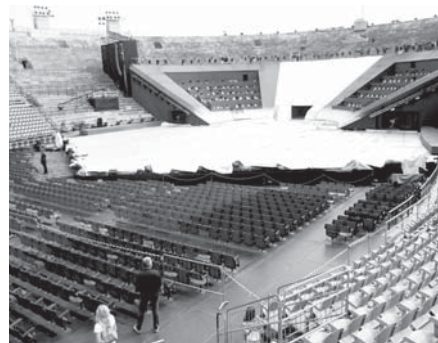


写真 b

ていない部分は、そのままオープン・エア・ミュージアムとなっている。

ヴェローナ市内には、他にローマ時代の門や碑文博物館もあるが、復元され再利用されている上述の2つの遺跡、とくに円形闘技場の印象は強烈で、ローマ時代と現代とが頭の中で交差してしまうような感じだ。私はこれまで、こうした円形闘技場や劇場が再利用さ



写真 c

れているのを幾度も見てきた。音楽会場として利用されている円形闘技場を、南フランスのニーム(写真 d) やスイスのアヴァンシュ(本誌 24 ページの写真 C 参照)、ドイツのクサンテン(写真 e) で見たし、南フランスのアルルでは闘牛の会場として使われていたのを見学した(写真 f)。しかし、ヴェローナの円形闘技場の利用は、その規模においても、徹底的に使用されている点でも、他から抜きん出ているように感じる。外周の石造のアーチ構造はともかくとして、観客席に座っても、アリーナに降り立っても、この闘技場で古代に想いを馳せることは、私ならずともかなり難しいのではないだろうか。

かつて私は本誌の 11 号(2011 年)のこの欄で、「遺跡の復元と利用—トリーアの場合—」と題してドイツのトリーア市に残る円形闘技場遺跡を取り上げたことがある。そして、その闘技場遺跡を再訪したときの記憶を綴りながら、アリーナ部分に臨時にプラスチックの座席をしつらえて剣闘士競技のパフォーマンスを観光客などに見せていることに言及し、アリーナの大きさの理解をゆがめてしまう可能性のあるこの催しについて「いささか興ざめの気分」と書いた。この時、私がトリーアの遺跡の利用の仕方に疑問を呈したのは、催しの設備が闘技場の大きさなどの正確な理解に支障をもたらすと懸念したからだけでなく、この円形闘技場を初め



写真 d



写真 e

て訪ねた時に感じた古代の剣闘士競技会場——人と動物の血が流された場所——に対する厳粛な思いが、再訪したときにみたプラスチック椅子の連なる光景で吹き飛んでしまい、ひどくショックを受けたからかもしれない。しかし、トリーアの円形闘技場遺跡の利用のみを批判するのは適切ではなかった。先に記したように、かなりの数の円形闘技場遺跡が、現在再利用をされているからである。



写真 f

21 世紀の今日、古代ギリシア・ローマ時代の遺跡をどのように維持・管理していくかは難しい問題だ。古代の遺跡を将来に残すためには、技術上、財務上の問題をはじめ、多くの課題がある。しかも、近年の考古学の学界では、「将来の世代のために遺跡を残す」という言説には論理的な根拠はほとんどない、文化財イコール善という通念も批判的に吟味しなければならない、というような意見も出されているそうである¹⁾。現実的な問題を考えれば、文化的な行事などに遺跡を活用して、「古代とともに生きる」ことも、手段として必要かもしれない。

この点で、思い出されることがある。数年前、イギリスのケンブリッジで、大学古典学部の先生たちが、市中で一番大きな書店、ヘファーズで開いた、バルーン・ディベートなる催しを見学したことがある。この書店のギリシア・ローマ学のコーナーの振興をはかるための催しと聞いた。詳細は略すが、メアリ・ビアド教授やポール・カートリッジ教授ら、ケンブリッジ大学古典学部のスタッフたちが出演し、特にカートリッジ教授はエジプト王の面をかぶり、クレオパトラに扮して話をするという具合であった。ケンブリッジ大学の大先生たちのその奮闘ぶりに、私は笑えない気分になった。そして、帰国後、古代史研究会の集まりで、その様子を、写真を研究会場の壁面に掲示して紹介した。この学問を守るために、振興をはかるために、ヨーロッパの同学の方たちが奮闘していることを日本人の研究者にも伝えなかったのである。古代史研究を振興するために、学者たちが民間と協力して活動することは、上述の遺跡の再利用による維持と、どこかで繋がっているような気がする。

ところで、古代史には関係ないが、冒頭に紹介したヴェローナには、世界的によく知られていることがある。この町がシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の舞台になっていることで、現在「ジュリエッタの家」「ジュリエッタの墓」など、関係する史跡に大勢の観光客が集まっていることである。ジュリエッタの像に触れ

るために殺到し、バルコニーで記念撮影、いや記念の口づけをしようとする観光客も多い。もちろん、史実でない可能性が高いことを知りながら、ジュリエッタの家を訪れる人もたくさんいるだろう。愛の物語の舞台となったことがきっかけで、多くのカップルがこの町を訪れ、ジュリエッタの家の入口の壁は落書きだらけ、恋人たちの「鍵」が無数に取り付けられている。世界中からこの町に恋愛に関わる手紙が届き、それに対してこの町の人々が返事を書いているという。ロミオとジュリエットは史実とかけ離れたものかもしれないのに、劇作に描かれた「愛」は多くの人々をこの町に集め、この都市に活気を持たせ、おそらく経済的にも多くの観光収入をもたらしているだろう。史実でなくとも、作り上げられたイメージであっても、このように町を変えてしまうほど力があることに、改めて驚いてしまう。古代ギリシア・ローマに関わる史跡にも、このような具合で観光客を集めているところもあるだろうか。いささかビント外れかもしれないが、私はなぜか、学生時代に習ったマックス・ヴェーバーの「理念の力の現実形成的意義」を思い出している。

註

- 1) 富井眞「書評：松田陽・岡村勝行『入門パブリック・アーケオロジ』同成社、2012年」『古代文化』第66巻第2号、2014年9月、147ページ。

(追記)

本稿が初校を済ませた段階にあった2014年11月5日、朝日新聞夕刊に「コロッセオに復興論!?!」「『床再建し格闘技・演奏を会を』賛否噴出」という記事が掲載された。記事の最後の3行に、ヴェローナの闘技場の再利用に言及されている。